

＝ 母の日に思う ＝

親孝行したい時に親はなし。最近、時々思うことである。私は今、故郷を行ったり来たりで3回目の単身赴任生活中。2000年9月から4年、2006年9月から4年、そして2014年9月から現在に至る。

妻と子供2人を残し、はじめて東京に赴任した2000年9月は母も元気で送り出してくれた。が、わずか2ヵ月後、悪性リンパ腫と診断され余命3ヵ月との連絡が兄よりあった。懸命に治療に専念し診断よりも倍以上の期間頑張ったものの、2001年6月22日未明に帰らぬ人となった。時は前後し、その前月の5月20日には妻方の母が「くも膜下出血」による突然の他界。残念ながら、業務の対応と突然の出来事とで、二人の母の死に目には間に合わなかった。組合員とその家族の幸せ追求を語る組合役員として妻や家族に申し訳ないかぎりである。

あれからもう17年の歳月が過ぎた。母の葬儀に帰る飛行機の中で、雑誌のコラムだったのだろうか、心に留まる言葉が目に入った。「神様がくれた最高の宝物は家族、自らつくる最大の宝物は友達」、こらえていた涙があふれ出た。母が私に送ってくれた言葉ではなかろうかと……。親の不安もよそに29歳から労働組合に専従し懸命に走ってきたが、母の死に目にも会えなかった情けなさの中で見つけた言葉だった。神様がくれた最高の宝物はまた一つ失ったが、最大の宝物はもっともっと増やせる。労働運動に携わる私への母からの最期の贈りものと思っている。

5月の第2日曜日（5月13日）は「母の日」。誰もが知っている行事、諸説あるが「100年ほど前のアメリカ・ウェストヴァージニア州で、アンナ・ジャービスという女性が亡き母を追悼するため、1908年5月10日にフィラデルフィアの教会で白いカーネーションを配ったのが始まり」という。母の日は、長い歴史の中でカーネーションを贈る日と定着しているが、日頃のお母さんの苦労をいたわり感謝を表す日でもある。

亡き二人の母に、心を込めて親不孝者の思いを届けたい。「親孝行したい時に親はなし。」お父さん、お母さんがいらっしゃる方は、モノだけではなく是非感謝の気持ちを伝えてほしい。親の笑顔をつくるのは、元気に仕事に励む姿、おいしそうに食事をし、お酒を飲み語る姿、わが子の幸せ etc…がそうであろうと思う。いくつになっても親は親、子は子。甘えたり、怒ったり、昔を懐かしんだり、そんな家族のことを考える時間を持つ日が母の日、父の日（6月17日・忘れないで!）なのかもしれない。

もとより、何にも勝る親孝行・愛する伴侶や子らへの孝行は、心身共の健康と無災害である。連休後、気だるい気持ちで仕事が始まった方もいるかもしれないが、私たちの仲間には祝祭日も、昼夜も分たず働いている仲間がいることを忘れないでほしい。そして、自らの幸せを実現するための場が職場であることも。気持ちを切り替えて「安全よし!」、細心の注意をはらっていこう。

サツキの五月、明るく活気あふれる月である。私も、もうひと踏ん張り、自らつくる最大の宝物（仲間）とともに、常に人を真ん中に据えた職場原点の好循環づくりにがんばろう。

ご安全に

2018年5月7日
日本基幹産業労働組合連合会
中央執行委員長 神田 健一